

# 園芸史におけるJ・S・ヒバード (園芸ジャーナリスト)の位置づけ<sup>1</sup>

新妻 昭夫(人間環境学科)

## はじめに

筆者は園芸文化研究所の助成研究(プロジェクト研究)「19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究」(2004~2006年度)の最終年度の報告を、「ガーデニング雑誌という世界」および「英国19世紀の園芸雑誌の研究——ガーデニング文化の大衆化の視点から」としてまとめた(新妻、2007年a、b)。そこで浮かび上がってきた問題のひとつに、19世紀半ばからの園芸ジャーナリストたちの無視できない活躍があった。なかでもジェイムズ・シャーリー・ヒバード(James Shirley Hibberd: 1825-90)の著作活動や雑誌の編集・発行は、今日の都市市民の余暇活動としてのガーデニングや家庭園芸の先駆けという観点から注目していいと考えられた。

ヒバードとはどういう人物だったのか。手始めにオックスフォード大学出版の『伝記辞典』(NBD)をひも解いてみると、本文は14行しかなく、重視されているとはいいがたい。職業は「ジャーナリスト、園芸ライター」とされ、「(44) *Floral World*」と「(51) *Gardener's Magazine*」の編集長だったことが主要業績として紹介され<sup>2</sup>、著書として「(03) *Brambles and Bay Leaves*」(1855年)、「(12) *Profitable Gardening*」(1863年)、「(24) *Familiar Flowers*」(1879-87年)があげられている<sup>3</sup>。また果樹や野菜(とくにジャガイモ)について実験を繰り返し、庭づくりのために次々に郊外へと引っ越したことも紹介され、「禁酒運動家で、肉食主義」だったことにも触れられている。

ガーデニング史ではどちらかといえば忘れられた存在であった園芸ジャーナリストとして、ヒバードとはどんな人物で、どんな活動をしていた

か、そして当時の社会、とりわけガーデニングの大衆化に及ぼした影響について調べることが、本研究の目的である。本稿では、初年度ということもあり、主として既存の研究にもとづいて整理を試みてみる。

## I: 博物学ジャーナリストとしての評価

筆者は本誌の前号に掲載された拙稿(新妻、2007年a)の注28で、ヒバードを「園芸ジャーナリスト」と限定せず、むしろ「博物学ジャーナリスト」と呼ぶべきだろうことを、進化生物学者の故・グールドのエッセイの一篇<sup>4</sup>を紹介して指摘したので、その点をあらためて調べることから始める。

英国19世紀つまりヴィクトリア朝の博物学(ナチュラル・ヒストリー)の興隆については、その通史のうち主要な3冊が邦訳されている。その3冊の索引を原著の発行年順に調べ、ヒバードの名前を探してみた。

まずはD・E・アレン『ナチュラリストの誕生』(原著は1976年)。索引でヒバードを探すと、1箇所だけ見つかった(208ページ)。19世紀半ばにいたる博物学趣味の一般市民への広がりや交通手段や水槽といった技術革新の役割を論じるなかで、シダ類の魅力の例としてヒバードの「植物の宝石」「健康さとあたたかな露のビーズできらめく羽毛で飾られたエメラルドグリーンペット」という表現が紹介されている。

次のリン・バーバー『博物学の黄金時代』(原著は1980年)も、1箇所だけヒバードに触れている(160ページ)。19世紀半ばの「ウォード氏の箱」つまり小型温室の流行と、そのなかで各種のシダを栽培するブームについての記述中の、ヒバード『シダの庭』(付表の16)からの引用である——「シダを“健康と、やさしき露のビーズ玉に飾られて煌く羽毛のはえたエメラルドの緑のペット”などと書いたシャーリー・ヒバードの文章などに魅了されない方がどうかしていたのだ」(上記のアレンの引用と同じ個所である)。

最後のリン・L・メリル『博物学のロマンス』(原著は1989年)も、ヒバードの登場は1箇所だけ(56ページ)。ヴィクトリア朝の英国人たちの都市化のなかでの自然嗜好について論じるなかである。そのような嗜好をうながした著述家としてヒバードの名と『趣味のよい田舎風家庭装飾品』(著作リストの09)をあげ、彼は「庭に藁の蜜蜂の巣箱のような土臭いものを置くこと」を勧

めていたという。

あらためて調べてみると、博物学の世界でもヒバードの名はさほど知られていず、マイナーな存在だったといえる。ただし、上記3冊ともに博物学そのものの興隆を論じることを主眼とした研究書であり、「園芸やガーデニング」あるいは「ジャーナリズム」そのものを議論しているわけではない。その意味で、バーバーとメリルが、ヒバードを著述家(ライター)として取り上げ、バーバーが彼の文章そのものに注目していることは特筆しておいていいだろう。彼の本が当時、それだけ人気があったことは事実だといえそうだからである。

## II：園芸ジャーナリストとしての評価

ヒバードの名前は、ガーデニング(園芸や庭園)の歴史での注目度もあまり高くはなかった。ただし、前号の拙論(新妻、2007a, b)で触れたWilkinson(1998, 2006)は唯一の例外であり、ヒバードを発掘し正面から論じている。園芸や庭園の歴史の研究におけるヒバードの評価がどれほどのものであったか(なかったか)についても、前節と同じように関連書の索引を使って確認してみる。

### II・(I)：日本の場合

我が国でもヒバードはほとんど無名といってよく、たとえば次の本ではまったく登場しない。赤川裕(2004年)『イギリス庭園散策』／赤川裕(1997年)『英国ガーデン物語』／武居・尼崎監修(1998年)『庭園史をあるく』。もっとも、これらの本は庭園史を主題とするものだからだといえるのかもしれない。

園芸文化をもっと幅広くとらえている川島昭夫『植物と市民の文化』(1999年)<sup>5</sup>は、「ヴィクトリア朝の花文化」における田園風景の重要性について述べるなかで、ヒバードの『家庭の農村風装飾、および都市の人々の楽しみ』(著者リストの09)を例にあげている。またシダ栽培用に流行していた「ウォード氏の箱」の考案者ウォードが「都会のなかの田舎(rus in urbe)」を希求していたと、ヒバードが述べている個所が引用されている<sup>6</sup>。

春山行夫『花の文化史』(1980年)は、索引ではたった1箇所だが、ヒバードをしっかりと扱っている(812ページ)。19世紀の花の流行を論じる各章の最後が「観葉植物」にあてられ、「イギリスで観葉植物を称賛し、その本を書いた先駆者はヒバード」だったとして、『新奇な美葉植物』(付表:ヒバードの著作リストの14)の序文から一部が紹介されている。また「たくさんの園芸原稿を書き、都市と郊外の園芸をさかんに」したことを指摘し、彼の略歴にも触れている(生地や父親の職業、最後はキク協会主催のキク渡来100周年記念展と国際キク会議の仕事で忙殺され、過労のため死んだとされることも)。また『花の世界』(雑誌リストの44)と『園芸家の雑誌』(同51)の編集長として成功したこと、また著作も6冊紹介している。上記の『美葉植物』のほか、野菜や果物の栽培についての『有益な庭』(著作リストの12)、『アマチュアのためのバラの本』(同13)、『アマチュアのための温室』(同21)、『シダの庭』(同16)、『アイビー』(同19)をあげ、おそらく彼自身がいちばん気に入っていたのは『キイチゴと月桂樹の葉——家庭的なもの美しいものについてのエッセイ集』(同03)であろうという。以上の春山行夫の記述は、後述するHadfield(1960)の引き写しとっていい。

## II・(2)：英国の場合

洋書に目を向けると、Uglow(2004)ではヒバードが4箇所出てくる。第18章(コテージ、フローリスト、品評会)に2箇所、そして第19章(都市園芸)と第20章(女性ガーデナーたち)にそれぞれ1箇所である。1箇所目(197ページ)はアロットメント・クラブや慈善団体の活動を、J・S・ヘンズロー<sup>7</sup>など聖職者を例に論じている個所で、ガーデニングは万病の治療となるという彼らの信念の1例として、「ガーデニングの親切な達人シャーリー・ヒバード」の次の言葉を引用している——「褐色の土に接していれば、どんな病気も治る」<sup>8</sup>。

2箇所目(202ページ)は古本(ヒバードの*The Kitchen Garden*:著作リストの22)に関連した著者自身の逸話。3箇所目(206-7ページ)は、都会ないし郊外での中産階級のアマチュア・ガーデニングの1例を、ディケンズ『大いなる遺産』(1861年)の主人公ウェミック氏の場合で説明し、このような「10メートル×20メートルの庭」を持つ人のために書いたのがヒバードだったという。彼

の雑誌と著書の何点かの名があげられ、彼とその時代が簡単に説明されている。

4箇所目(214ページ)は食卓などを花で飾る趣味の流行について述べたなかで、ヒバードの『趣味のよい家庭のための田園風の装飾』(著作リストの09)<sup>9</sup>を引用し、花卉を楽しむことと、それが「家庭」の情操につながるという点では、「1950年代の女性雑誌のフラワーアレンジの秘訣とあまりちがわない」と指摘する。引用箇所を全文紹介すると——「花には社会的な長所があまりにたくさんあり、それを数え上げるのが困難なほどです。部屋に入るとき、テーブルに花が飾られているのが目に入ると、誰もが歓待されていると感じるでしょう。花がそこにあると、女主人は晴れやかに見えるし、子どもたちも喜んで見えるように見え、犬や猫までもが私たちの到来を歓迎しているように見えます。その場全体の雰囲気とそこにいる全員が、バラの、ランの、ユリの、モクセイソウの魅惑のおかげで、心温かく、家庭的で、美しく感じられるのです」<sup>10</sup>。

Hadfield(1960)は2箇所ヒバードに触れている。1箇所目(341-3ページ)は、先に紹介した春山行夫のヒバードについての記述の拠り所である。2箇所目(371ページ)は、1884年5月3日に創刊された週刊園芸誌『アマチュア・ガーデニング』(前号掲載の新妻2007年bの雑誌リストの59)について。この雑誌の対象は「確実に増加しつつあった、庭を所有するが、庭師をほとんど、あるいはまったく雇うことのできない階級」だったこと、またヒバードが最初の編集長だったが、雑誌が急成長したのは1887年に編集長をサンダーズ<sup>11</sup>が引き継いでからだったことを指摘している。

Helmreich(2002)は一箇所だけ(168ページ)。ジーキルのマンステッド・ウッドの自然を生かした作庭姿勢が、19世紀中葉の主流に対立するものだったとし、当時の代表的な意見のひとつとしてヒバードから次の個所が引用されている——「庭造りの趣味を修養している誰もが心にとめておかねばならないのは、庭は人工的な考案物であって、森からすくいとった一片ではなく、ある意味では家屋の延長だということだ。芸術の創造であって、野生の自然の一片ではない……のだから、いたるところに芸術的な趣味が見られなければいけない」。

ちなみに、ヘルムレイヒはこのヒバードの言葉をElliot (1986)<sup>12</sup>から引用しているが、ヒバード『趣味のよい家庭……』(著作リストの09)第2版を調べてみると、「プレジャー・ガーデン」のセクションの冒頭に近い箇所(330ページの下部)の記述である。この第2版の刊行は1857年であり、ロビンソン『ワイルド・ガーデン』(1870年)や園芸週間紙『ザ・ガーデン』の創刊(1871年)の15年ほど前である。もちろん、ジーキルとロビンソンはまだ出会っていない。「19世紀中葉の主流」の「代表的な意見」というのであれば、アマチュアのヒバードより適切な資料が他にあるはずであり、そのことから逆に、ヒバードの文章が職業ガーデナーのものに比べ、格段に引用に適していることがうかがえる。

園芸人名事典も2冊、調べてみた。Desmond (1994)は、専門を「園芸ジャーナリスト (Horticultural journalist)」とし、編集した雑誌は(44) *Floral World* (1858-72)と(51) *Gardener's Magazine* (1861-90)の2誌をあげている<sup>13</sup>。Hadfield et al. (1980)は、専門を「園芸家(Horticulturist)」「ライター」とし、前述のHadfield (1960)の内容を簡略にした記述になっている。やや注目すべきは、ヒバードの著書を「Lighthearted books」と表現していることだが、おそらく一般向けの読みやすい本という意味であろう。

## II・(3)：王立園芸協会(RHS)との関係

『RHS200年史』(Elliot, 2004)の索引では、ヒバードの名前が7箇所であげられている。最初の3箇所は、第2章「危機そして危機」中であり、協会の議事録などを主要な資料としている。

1箇所目(29ページ)は、RHSの1873年の荒れた年次総会についての記述中で、他の論争とともに「ヒバードが財政をめぐって評議会を攻撃した」ことが紹介されている。2箇所目(31ページ)も1875年の荒れた総会についての記述中で、(25)「ガーデナーズ・クロニクル」紙が「ヘンリー・コール<sup>14</sup>とシャーリー・ヒバードを共同事務局長……に想定した冷やかしの提案」を掲載したという。3箇所目(32ページ)は1876年の年次総会でヒバードが、「協会の余剰利益から支払われるべき債権の償還に、地方品評会用のお金が非倫理的に流用された」ことへの疑義を声高に指摘したことを記録している。

この3箇所からは、ヒバードが当時のRHSの会員のなかで少数派ではあったが、発言力をもっていたことが示唆される。また財政批判の具体例として、当時の園芸界の少数派であったフロリストにとって重要な品評会をめぐる例をあげていることも指摘しておくべきだろう。

4箇所目(69ページ)は第4章「協会の庭園:チズウィックとケンジントン」中で、ケンジントンに新たに開園した庭園に関するいくつかの評価の一例として、ヒバードがみずから編集する(44)*The Floral World*の第4巻(1861年)に書いた文章が引用されている。5箇所目(215ページ)は第12章「園芸植物の分類学と登録」中の国際命名規約の部分で、1866年にケンジントンのRHS庭園で開催された国際園芸博覧会に合わせて召集された第1回国際植物学会議で、「ガーデニング・ジャーナリストのヒバードが論文<sup>15</sup>を読み上げ、そのなかで植物命名規約の制定<sup>16</sup>を求めた」ことが記録されている。

6箇所目(238ページ)は第13章「園芸科学」中であり、ダーウィン進化論が登場し遺伝学が未発達だった時代に交雑による育種が「芸術(fine art)」の域まで達したとし、ヒバードが自ら編集する雑誌(51)*Gardeners' Magazine*(1883年4月7日号)に書いた文章の一節が引用されている。7箇所目(16ページ)は第16章「装飾的な庭園植物」の冒頭部分の、協会に1859年に設置された花卉委員会(前年に果実委員会ができた)の説明中で、19世紀から20世紀にかけての委員の1人として名前があげられている。

4箇所目から7箇所目も、命名規約の制定を提案したり協会の花弁委員であったりと、ヒバードが当時の園芸界においてそれなりに位置づけられていたことをうかがわせる。と同時に、引用のしかたから見て、ヒバードが資料価値の高い文章を残したことを、この『RHS200年史』の著者が認識していたことが示唆される。

RHSの花弁委員会の構成員についても説明があり、顔ぶれを一瞥してみると、この委員会におけるヒバードの位置づけが見えてくる。創設時の委員長は、キングズ・カレッジの植物学教授Arthur Henfrey(1819-59)。ユニヴァーシティ・カレッジの植物学者ジョン・リンドリー(1799-1865)も委員の一人だが、実質的には協会の代表として加わっていたようだ。創設時の委員中もっとも人数の多いのは種苗業者で、ほかに花卉に造詣の深い聖職者が3人、ヘッ

ド・ガーデナーが3人、そしてアマチュアの育種家が何人かいた(1例として、内科医で白花のペラルゴニウムや斑入りのグラジオラスを作出したAllan Maclean (1796-1869)の名があげられている)。間もなく委員会に加わったのが、ペラルゴニウムの育種の草分けのDonald Beaton (1802-63)<sup>17</sup>だが、彼は「喧嘩っ早いジャーナリスト」としても有名だった。

その後に委員会に加わった人物として名前を挙げられているのは、上述のヒバードを除くと、セント・ジョージ病院の植物学講師のMaxwell T. Masters (1833-1907)<sup>18</sup>、貿易商で多数の新種のランをグアテマラで採集したGeorge Ure Skinner (1804-67)、ラトランド公のビーバ城のガーデナーだったWilliam Ingram (1820-94)<sup>19</sup>、聖職者でフロリストのH. H. D' Ombrain<sup>20</sup>、ガーデナーでキュー王立植物園の園長などを歴任したW. J. Bean (1863-1947)、エンフィールドのミデルトン・ハウス(Myddleton House)の庭園と球根植物で名を知られるE. A. Bowles (1865-1954)、エンフィールドの種苗業者でアイリスの交雑種を多数作り出したAmos Perry (1869-1953)、カーネーションなどナデシコ類を専門とした種苗業者(Haywards Heath、サセックス州)のMontagu Allwood (c.1879-1958)。

以上のように、RHSの花弁委員会は植物学者と種苗業者を中心として構成されていたとっていいだろう。そのなかで異色の存在なのが、ジャーナリストのビートンとヒバードである。もっともビートンはガーデナーでもあり、ヴィクトリア朝の主流の花壇設計の第一人者だった。いずれにせよ、ビートンはペラルゴニウムの、ヒバードはキクの育種で名をはせた「フロリスト」だったことは注目していいだろう。英国園芸界におけるフロリストの位置づけには、前号掲載の拙稿(新妻、2007年b)で指摘したように、微妙なものがあるからである。

なお、以下の庭園史書には、ヒバードは登場していない——Scott-James & Lancaster (1977) / Fearnley-Whittingstall (2002) / Brown (1999) / Quest-Ritson (2001)。

### Ⅲ：結びにかえて

本稿の結論としていえるのは、博物学史においても、また園芸史や庭園史



においても、ヒバードの評価は低かったということである。むしろ、あまり注目されていなかったというほうが適切だろう。例外といえるのがHadfield (1960)と、それに準拠した春山行夫(1980年)で、扱いはけって大きくはないが、正当に評価しているといえるだろう。

ただし、簡単であれヒバードに言及している著者たちが、彼がジャーナリスト(作家および編集者)として成功していたこと、とりわけ彼の文章が大衆に影響をおよぼしていただろうことを認識していることは指摘していい。彼は当時の人気ライターであり、一般の人々に愛読されていたであろうということである。

軽視されてきた理由のひとつは、これまでのガーデニング史の研究が基本的に庭園史であって、広く園芸文化全般をあつかう分野とはいいがたかったからだろう。さらには、ヒバードが軽視されてきたもうひとつの理由として、ジャーナリストという職業が軽んじられていた、あるいは疎まれていた時代だったことを指摘すべきかもしれない。この点については、前報で何度か触れたグレニー(George Glenny: 1793-1874)という最初の園芸ジャーナリストが残した悪影響という見かたもできるだろう<sup>21</sup>。グレニーとRHSとの品評会をめぐる争いは、リンドリーの頑なな態度にも一因があったと考えられるが、グレニーが自分の雑誌を武器にして繰り広げたキャンペーンの罵詈雑言には、一昔前の我が国の悪徳経済ジャーナリストを思わせるものがある。

先に引用したNBDでも触れられていたよう、ヒバードがジャーナリストとして活躍した素地は、若いころの「禁酒運動」や「菜食主義」との接触のなかで形成されたと考えられる。そのことから彼のジャーナリストとしての姿勢が、グレニーとはむしろ正反対の、きわめて穏やかで健全なものであっただろうことが推測される。

#### 表1:ヒバードが編集した雑誌類

- (44) *The Floral World and Garden Guide* (1858-80)
- (45) *Garden Oracle* ('and Economic Year Book') (1859-1900---)
- (47) *Gardener's Weekly Magazine and Floricultural Cabinet* (1860-62)
- (51) *Gardener's Magazine* (1862-82) → *Gardeners' Magazine* (1882-1916)

表2:ヒバードの著作リスト (Wilkinson, 1998による。ただし死後の他の編者による版は省略)

- (01) Hibberd, S. H. (ed.), 1851. *Porphyry on Abstinence from Food*. William Horsell, London. (Annotated edition of the Greek philosopher's treatise on vegetarianism.).
- (02) Hibberd, S. H., 1851. *Summer Songs*. John Chapman, London. (Poems written to his wife and relating to flowers.).
- (03) Hibberd, S. H., 1855. *Brambles and Bay Leaves*. Longman Brown Green, London. (1862, revised ed., Groombridge & Sons, London.; 1873, 3rd ed.).
- (04) Hibberd, S. H., 1855. *The Town Garden*. Groombridge & Sons London. (1859, revised ed.).
- (05) Hibberd, S. H., 1856. *The Book of the Freshwater Aquarium*. Groombridge & Sons, London.
- (06) Hibberd, S. H., 1856. *The Book of the Marine Aquarium*. Groombridge & Sons, London.
- (07) Hibberd, S. H., 1856. *The Book of the Water Cabinet*. Groombridge & Sons, London.
- (08) Hibberd, S. H., 1856. *An Epitome of the War, From its Outbreak to its Close*. James Blackwood, London.
- (09) Hibberd, S. H., 1856. *Rustic Adornments for Homes of Taste*. Groombridge & Sons, London. (1857, 2<sup>nd</sup> ed.; 1870, revised ed.).
- (10) Hibberd, S. H., 1857. *Garden Favourites and Exhibition Flowers* (published in parts). Groombridge & Sons, London. (1858, re-issued in one volume as *Garden Favourites*).
- (11) Hibberd, S. H., 1860. *The Book of the Aquarium*. Groombridge & Sons, London.
- (12) Hibberd, S. H., 1863. *Profitable Gardening*. Groombridge & Sons, London. (1878, 1884, 1893, further eds., W. H. & L. Collingridge, London).
- (13) Hibberd, S. H., 1864. *The Rose Book*. Groombridge & Sons, London. (1874, 1885, later eds became *The Amateur's Rose Book*).

- (14) Hibberd, S. H., 1868. *New and Rare Beautiful-leaved Plants*. Bell & Daldy, London. (1870, 2<sup>nd</sup> ed.).
- (15) Hibberd, S. H., 1868. *Clever Dogs, Horses etc.* Groombridge & Sons, London. (Stories about animals doing brave deeds).
- (16) Hibberd, S. H., 1869. *The Fern Garden*. Groombridge & Sons, London. (up to 1881, nine re-issues; 1894, revised ed., W. H. & L. Collingridge, London).
- (17) Hibberd, S. H., 1870. *Field Flowers, A Handy Book for the Rambling Botanist*. Groombridge & Sons, London. (1883, 1894, further eds. W. H. & L. Collingridge, London).
- (18) Hibberd, S. H., 1871. *The Amateur's Flower Garden*. Groombridge & Sons, London. (1875, 1878, 1884, 1892, further eds., W. H. & L. Collingridge, London).
- (19) Hibberd, S. H., 1872. *The Ivy*. Groombridge & Sons, London. (1893, 2nd ed., W. H. & L. Collingridge, London).
- (20) Hibberd, S. H., 1872. *The Seaweed Collector*. Groombridge & Sons, London.
- (21) Hibberd, S. H., 1873. *The Amateur's Greenhouse and Conservatory*. Groombridge & Sons, London. (1875, 1883, 1888, further eds.).
- (22) Hibberd, S. H., 1877. *The Amateur's Kitchen Garden*. Groombridge & Sons, London. (1893, revised ed., W. H. & L. Collingridge, London).
- (23) Hibberd, S. H., 1878. *Watercress without Sewage: Home Culture of the Watercress*. E. W. Allen, London.
- (24) Hibberd, S. H., 1879-87. *Familiar Garden Flowers*, 5 vols. Cassell, Petter, Galpin & Co., London. (1897, 1899, further eds., Cassell & Co., London).
- (25) Hibberd, S. H., 1879. *Water for Nothing: Every House its Own Water Supply*. Effingham Wilson, London.
- (26) Hibberd, S. H. (ed.), 1879. *Greenhouse Favourites*. Groombridge & Sons, London.
- (27) Hibberd, S. H., 1882. *The Alphabet of Gardening*. Gardeners' Magazine, London.
- (28) Hibberd, S. H., 1886. *The Golden Gate and Silver Steps*. E. W. Allen, London. (Collection of autobiographical stories, plays for children, poems, etc.).
-

## 参考文献

赤川裕(2004年)『イギリス庭園散策』(岩波アクティブ新書)。

赤川裕(1997年)『英国ガーデン物語——庭園のエコロジー』(研究社)。

アレン、D・E(1990年)『ナチュラリストの誕生——イギリス博物学の社会史』(阿部治訳、平凡社)。(原著:Allen, D. E., 1976. *The Naturalists in Britain: A Social History*. London: Allen Lane)

川島昭夫(1999年)『植物と市民の文化』(世界史ブックレット36、山川出版社)。

グールド、スティーヴン・J(2002年)『ダヴィンチの二枚貝』(渡辺政隆訳、早川書房)。

武居二郎・尼崎博正監修(1998年)『庭園史をあるく——日本・ヨーロッパ編』(昭和堂)。

新妻昭夫(2004年)「19世紀前半における植物学の近代化と女性の囲い込み:ラウンド夫妻を事例として(一般助成研究報告)」、『園芸文化』(恵泉女学園大学園芸文化研究所報告)、第1号:80-85ページ)。

新妻昭夫(2007年a)「ガーデニング雑誌という世界」。『園芸文化』(恵泉女学園大学園芸文化研究所)第4号:1-13。

新妻昭夫(2007年b)「英国19世紀の園芸雑誌の研究——ガーデニング文化の大衆化の視点から」。『園芸文化』第4号:192-235。

バーバー、リン(1995年)『博物学の黄金時代』(高田宏訳、国書刊行会)。(原著:Lynn Barbar, 1980. *The Heyday of Natural History, 1820-1870*. London: Jonathan Cape)

春山行夫(1980年)『花の文化史——花の歴史をつくった人々』(講談社)。

メリル、リン・L(2004年)『博物学のロマンス』(大橋洋一・照屋由佳・原田祐貨訳、国文社)。(原著:Lynn, L. Merrill, 1989. *The Romance of Victorian Natural History*. Oxford: Oxford Univ. Press)

Brown, Jane., 1999. *The Pursuit of Paradise: A Social History of Gardens and Gardening*. Harper Collins Publishers.

Desmond, R., 1977. Victorian Gardening Magazines. *Garden History* 5 (3): 47-66.

Desmond, R., 1994. *Dictionary of British and Irish Botanists and Horticulturalists, including Plant Collectors, Flower Painters and Garden Designers*. 2<sup>nd</sup> ed. Taylor and Francis (London).

Elliott, Brent, 1986. *Victorian Gardens*. London: B. T. Batsford.

- Elliott, Brent, 2004. *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004*. Phillimore & CO. LTD.
- Fearnley-Whittingstall, Jane., 2002. *The Garden: An English Love Affair*. A Seven Dials Paperback.
- Hadfield, Miles, 1960. *A History of British Gardening*. Hutchinson and Co. (Penguin Books (London), with Appendix 1939-1978 by Geoffrey and Susan Jellicoe, in 1985.)
- Hadfield, M., Harling, R. and L. Highton, 1980. *British Gardeners: A Biographical Dictionary*. A. Zwemmer Ltd. In association with The Conde Nast Publications Ltd.
- Helmreich, Anne., 2002. *The English Garden & National Identity: The Competing style of Garden Design, 1870-1914*. Cambridge University Press.
- Quest-Ritson, C., 2001. *The English Garden: A Social History*. Penguin Books.
- Scott-James, Anne & Osbert Lancaster, 1977. *The Pleasure Garden: An Illustrated History of British Gardening*. John Murray (2004 ed., Frances Lincoln).邦訳:アン・スコット-ジェイムズ著+オズバート・ランカスター絵(1998年)『庭の楽しみ——西洋の庭園二千年』(横山正訳、鹿島出版会)。
- Uglow, J., 2004. *A Little History of British Gardening*. Chatto & Windus, London.
- Wilkinson, A., 1998. The Preternatural Gardener: The Life of James Shirley Hibberd (1825-90). *Garden History* 26 (2): 153-75.
- Wilkinson, A., 2006. *The Victorian Gardener: The Growth of Gardening & the Floral World*. Sutton Publishing (Stroud, Gloucestershire).

## 注

- 1 本稿は園芸文化研究所の2007年度助成研究(一般研究「英国19世紀後半における都市型家庭園芸のはじまり——シャーリー・ヒバード(園芸ジャーナリスト)を事例として」)の報告である。密接に関連する別稿(50ページ)も参照されたい。
- 2 雑誌名の頭に付した番号は、前号掲載の新妻(2007年b)の付表の整理番号である。なお本報告末尾のヒバードの著作リストの整理番号と区別するため、書体をゴチとした。
- 3 上の注2に記したように、ヒバードの著書の題名の頭に付した番号は、末尾の著

- 作リストの整理番号である。
- 4 グールド「面と向かって明瞭に見る」(『ダヴィンチの二枚貝』の第3章)。ついでに宣伝すれば、グールドの最後の著書の一冊『神と科学は共存するか?』(共訳、日経BP)が昨年10月に刊行された。ただし、本稿とあわせ読む必要はない。
  - 5 前号の拙論(新妻、2007年a)でフロリストに触れたとき(とくに注27)、不勉強ながらこのブックレットを見逃していた。ここに明記し、反省の証としたい。
  - 6 ウォード氏の「都市のなかの田舎」への希求が、ヒバードのどの本に紹介されているかは、いまのところ不明。『趣味のよい家庭……』(著作リストの09)の第2版(1857年)のファクシミリ版(1987, Century in Association with the National Trust)を調べてみると、序文の末尾でこの言葉が使われているが、この本全体の主旨についてのことであり、とくにウォードの言葉だとはされていない。またこの本のウォード氏の箱の部分やシダの庭の部分にも、この言葉は見つからない。『シダの庭……』(同、16)の第10版のファクシミリ版もめくってみたが、この言葉は見当たらなかった。
  - 7 John Stevens Henslow (1796-1861)。聖職者、植物学者、地質(鉱物)学者。進化論のダーウィンはケンブリッジの学生時代、ヘンズローから植物学などの手ほどきを受けた。青年ダーウィンのもっともよき理解者で、ダーウィンにビーグル号乗船の機会を紹介したのも、反対する父親への説得を手伝ったのもヘンズローだった。
  - 8 「1877年」とあるので、著作リストの(22)*The Amateur's Kitchen Garden*だとわかる。古本で入手した新版(1893年)をめくってみたら、第2章「菜園のアマチュア」の冒頭にこの言葉があった。全文は以下のとおり——“Contact with the brown earth cures all diseases, mitigates all troubles and anxieties, smoothes the wrinkles that city cares have engraved on the face.”
  - 9 前段で触れた故・グールドのエッセイ(注4参照)は、ヒバードのこの本を題材としている。
  - 10 第2版(1857年)のファクシミリ版(前記の注6を参照)をめくってみると、文章は若干修正されているが、「食卓と窓辺の花弁装飾」のセクションの冒頭からすぐの個所(p.176)からの引用だとわかる。
  - 11 前号掲載の新妻(2007年b)の「付表B:園芸雑誌の編集者たち」を参照されたい。

- 12 Elliot, 1986. *Victorian Gardens*. 引用はp. 166から。
- 13 この事典は研究者向けに編集され、資料探しなどには便利だが、いわゆる事典としては使いづらい。
- 14 Henry Cole。どのような人物かは不明だが、『RHS200年史』に何箇所かで登場し、有力な評議員だったこと、また1870年代に「サー(Sir)」の称号を授与されたらしいことはわかる。Desmond (1994)にも出ていない。
- 15 この論文は(44)*The Floral World*の第?巻(1866年)に掲載された。
- 16 この会議の議長がドラフトを作成し、翌年に開催された第2回の会議で制定された規約は、開催地にちなんで「パリ規約」と呼ばれている。
- 17 ビートンはガーデナーであり、花壇設計の権威として知られ、交雑による育種にも関心をもっていた(Desmond, 1994)。
- 18 パクストンが死去した1865年、「ガーデナーズ・クロニクル」紙の編集を引き継ぎ、他界する1907年までその職にあった。
- 19 父親のThomas Ingram (c.1796-1872)も王室付きのガーデナーで、ウィンザーのRoyal Gardensの総責任者などを務めた。
- 20 前号掲載の新妻(2007年b)の付表Bを参照されたい。(49)*Floral Magazine*の編集長を途中から引き継いだ。
- 21 グレニーについては、新妻(2007年a)の6ページ、および新妻(2007年b)の198と208ページを参照。また新妻(2004年)も参照されたい。